

令和6年度就労支援地域ネットワーク推進事業

# 就労支援 連携事例

2024

就労支援  
障害者雇用  
職場復帰支援



令和6（2024）年度に実施された本事業では、県内で就労支援・障害者雇用・職場復職支援等に関わる、就労支援機関・企業・学校・医療機関・行政機関等の方々（以下、関係機関）を対象とした研修交流会を実施しました。

県内各地で実施した本研修交流会では身近な地域での就労事例を紹介し、関係機関の役割や支援過程の共有及び参加者間での意見交換の機会を設け、地域の就労支援・雇用力を高める機会として実施しました。

こちらでは、本事業を通して得られた就労支援・障害者雇用・職場復帰支援の取組を編集し、**関係機関の役割や支援過程・支援のポイント等をまとめた事例**として紹介しています。皆様の日々の支援・これからの支援にご活用ください。



## 目次 <テーマ>

### <就労支援・障害者雇用>

- 1) 就労支援機関・企業・医療機関と共に生活管理を行い、就労を継続している事例  
(知的障害・発達障害／製造業)
- 2) 就労支援機関を利用し課題の整理と実績を積み、就労に至った事例  
(身体障害／総務事務)
- 3) 就労支援機関・企業と共に体調や生活環境の変化を都度確認し、就労を継続し  
ステップアップをしている事例 (精神障害／総務事務)

### <職場復帰支援>

- 4) 産業保健サービスを活用し、治療を継続しながら職場復帰をした事例  
(身体障害／測定分析業)
- 5) 医療及び福祉でリハビリテーションや訓練を受け、職場復帰をした事例  
(身体障害・精神障害／営業事務)



※本事例集に出る主な就労支援機関名の詳細について、以下をご参照ください。

「とちぎ障害者就労支援ガイドブック」 栃木県保健福祉部障害福祉課



## 基本情報

## 20代男性、知的障害（B2）・自閉症スペクトラム障害

- \* 温厚な性格。特別支援学校を卒業し、就労移行支援を利用。
- \* 食が細く、時折低血糖で体調不良になることがあった。
- \* 作業は真面目に取組み、口頭指示で内容を理解し行うことができる。
- \* 数字への興味が強く、時間や数の管理が得意。複数同時作業が苦手。

## 経過

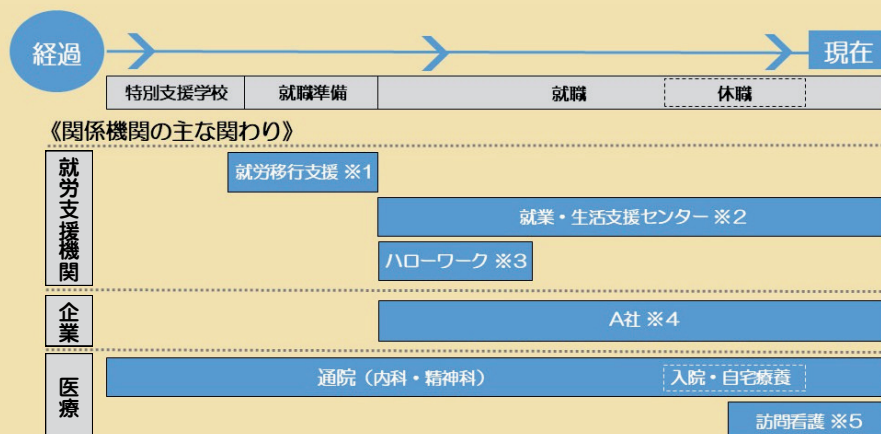
## 就職準備期

- \* 企業への就職を希望し、障害者就業・生活支援センター（以下、就業・生活支援センター）に登録。センターが把握する本人・企業の情報を合わせ、製造業のA社と協議の上、見学・実習を実施。
- \* 部品加工を行い、業務の中でも時間や数値を活用しながら適応ができた。
- \* A社がハローワークに出した障害者雇用求人に応募し、フルタイムで採用。

## 就職以降

- \* A社の部署担当者・人事担当者が協働した定期巡回及び面談（業務・社内生活の事）、就業・生活支援センターの定期訪問及び面談（体調・家庭生活の事、家族との連絡調整）を実施。
- \* 当初は順調に勤務していたが、半年経過頃より、痩せてきた様子や業務中にボーっとする様子があり、部署担当者から人事担当者及び就業・生活支援センターと共有。
- \* 勤務を継続するも、数日後には顔のむくみ・挨拶の様子の違和感等があり。人事担当者が面談を行い、受診を促す。
- \* 受診後すぐに入院治療となり、退院後は自宅療養となる。訪問看護を利用し、自宅で健康状態・食事状況等のケアを受ける。
- \* 休職中の様子について、就業・生活支援センターやA社と定期的に連絡を取り情報共有。職場復帰を希望し、医療機関と連携しながら復帰のタイミングを図る。
- \* 体調回復し、週3日から職場復帰。引き続き、就業・生活支援センター、企業内支援、医療機関のフォローを受けながら継続勤務をしている。

## 経過と関係機関の関わり



- ※1）就職に向けた訓練希望や能力の把握  
 ※2）職場見学・実習調整、定期訪問・面談、企業・医療機関・家族との調整  
 ※3）職業相談・紹介  
 ※4）所属部署・人事が協働した定期巡回及び面談、業務・社内生活の様子を把握 → 関係機関と共有  
 ※5）健康状態・食事状況等のケア

## 事例から学ぶ支援のポイント

- \* 関係機関が対象者の強みも課題も共有し、定期的に状況把握をしている事で、変化に気づきやすく早めの対応ができた。
- \* 職場での定期的な状況把握が本人の心理的安全性を保ち、就労継続に繋がった。
- \* 関係機関同士で役割や強みを把握し、また企業が関係機関を上手に活用できる事が、支援がより効果的なものとなる。

## 基本情報

## 20代男性、身体障害（四肢の筋力低下）

- \* とても大人しく、質問には短い言葉で答えるのみで口数は少ない。高校卒業後、在宅生活を数年続けていた状況で、家族から就業・生活支援センターに相談。
- \* 手足の筋力が弱く、短距離の歩行はできるが転倒することがある。自転車移動は可能。
- \* 手先での細かい作業が苦手だが、PC操作は可能。
- \* 苦手な作業も諦めずに工夫して上達することができる。
- \* 自分から話しかける事は苦手だが、声掛けへの返答はできる。

## 経過

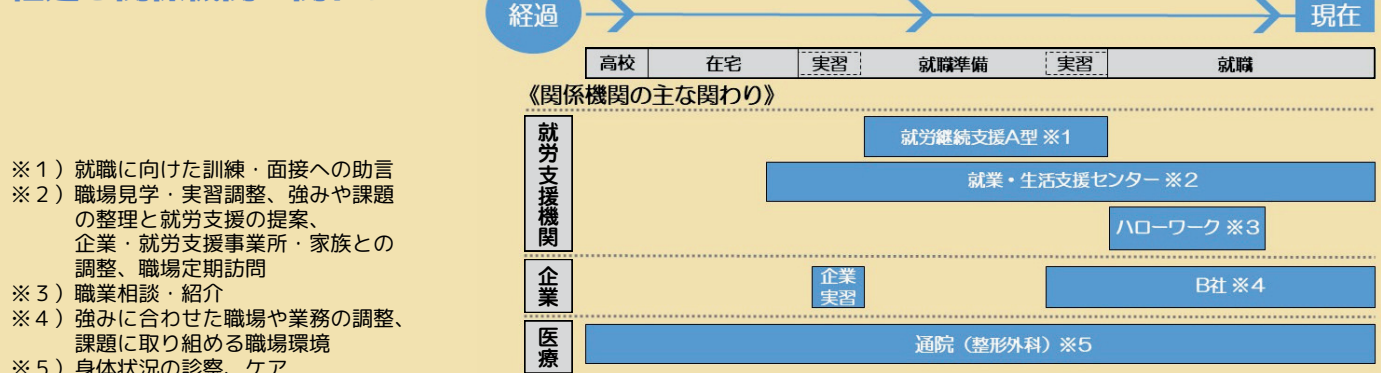
## 在宅～就職準備期

- \* 企業への就労希望があり、近所の企業で職場実習を実施するが、体力や継続勤務への課題、報連相の課題があり就労には至らず。
- \* 就労継続A型支援事業所にて、就労に向けた生活リズムの立て直しやコミュニケーション力の向上を目標に通所。
- \* 無遅刻、無欠勤で清掃作業やPC作業に取り組めた。自分から話しかける事は難しいが、電話を折り返しかける等の返答ができるようになる。
- \* 通所1年の実績を経て、就業・生活支援センターが仲介し、実習からじっくり受け入れを検討でき、バリアフリー環境があるB社の総務事務に見学・実習を実施。
- \* 机上作業や清掃作業を実施し丁寧にに取り組むことができ、作業指示にも対応できた。
- \* ただし、入社時の挨拶や報告等、能動的なコミュニケーションは課題があった。
- \* B社がハローワークに出した障害者雇用求人に応募し、採用面接を実施。課題はあるが、継続勤務ができること、簿記の資格を持っている事などをアピール。また、A型事業所で面接・履歴書の書き方練習を実施。その中の助言で、面接時に自作の手芸作品を持参。そこから話題が広がり、本人から積極的に話さずともコミュニケーションをとることができた。

## 就職以降

- \* 週5日6時間で採用。真面目で丁寧に業務に取り組んでいる。コミュニケーションの課題はあるが、必要な報連相ができるよう、少しずつ指導育成を図っている。
- \* 社員研修や歓迎会等の場面には自ら参加。他者との交流を拒むことはないため、ゆっくり馴染んでいる。
- \* 就業・生活支援センターが3か月～半年に一回程度訪問・面接。その他はB社の担当者が欠勤の際などにセンターと連絡共有をしながら支援を継続している。

## 経過と関係機関の関わり



## 事例から学ぶ支援のポイント

- \* 企業実習を行うことにより強みと課題が明確になり、就労支援事業所での訓練に目標をもって取り組めた。
- \* 就労支援事業所でできる事の評価と課題への対応を練習する事で、実績と見立てを根拠をもって企業に示すことが出来た。
- \* 面接時、敢えて職場外での様子を示すことにより、コミュニケーションが広がりその人らしさを伝える事ができた。
- \* 企業側の本人の強みに合わせた職場や業務の調整、時間をかけて課題に取り組める職場環境の設定が、本人にとって安心かつ成長のできる環境を作り出している。



## 基本情報

## 30代男性、精神障害（うつ病）

- \* 礼儀正しく真面目な性格。営業職、事務職等で正社員勤務経験あり。
- \* 妻子あり、仕事や子育てに懸命に取り組み、睡眠時間がとれずイライラ感と無気力感があり精神科を受診。うつ病の診断を受け服薬治療を開始。
- \* 以降、体調不良による欠勤、退職、転職を数年単位で繰り返していた。

## 経過

## 就職準備期

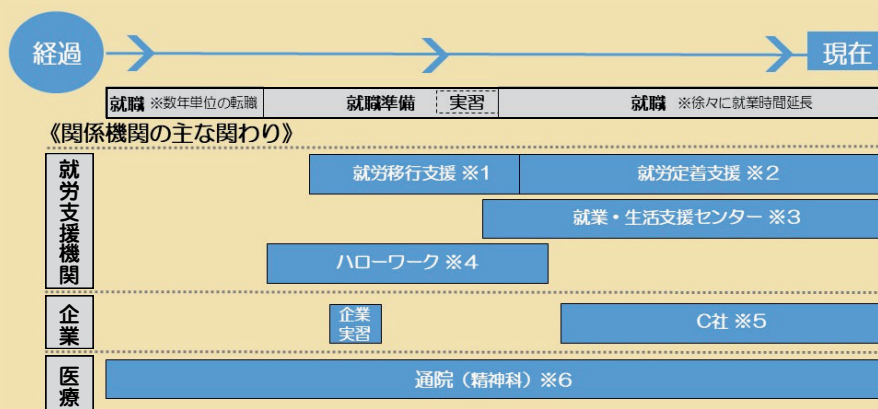
- \* 働き方を一から考え直したく、ハローワークの精神・発達障害者雇用サポーターに相談。雇用保険の受給期間中に就労移行支援に通所し、体調に合わせた働き方を検討していく方針となる。
- \* 就労移行支援事業所にて、体調管理方法の習得や生活リズムの立て直しを目標に通所。一定の睡眠時間の確保をし、週3日・半日通所から始め、徐々に週5日・一日通所が可能となる。
- \* 就労移行支援事業所やハローワークと相談しながら、就職先を検討。子供の進学等の環境変化が重なるタイミングでもあり、無理なく週5日・6時間から始められるC社の総務事務に見学・実習を実施。
- \* 作業は問題なく実施可能。新しい環境への緊張感が高く、多汗・疲労感があったが就職したい意向あり。
- \* C社がハローワークに出した障害者雇用求人に応募し、採用面接を実施。体調を鑑み、週5日4時間の勤務から働く事を希望し、採用となる。

## 就職以降

- \* 就業・生活支援センターに登録し、月一回職場内での面談を実施。また、C社の企業内支援員（医療福祉経験者）と常に状況を共有し、定期面談を実施。
- \* 業務には問題なく取り組み、継続勤務できていたが、休日の行事等に力を注ぎすぎると週明け欠勤になることがしばしばあり。
- \* 就労定着支援事業を利用し、休日に面談を実施し休日の過ごし方等を相談。
- \* 欠勤に繋がる生活パターンの把握や家庭での環境変化が落ち着いたこともあり、勤務が安定。
- \* 企業内支援員を含む関係機関と協議し、年単位で徐々に勤務時間を延長。週5日8時間のフルタイムまで延長することができた。
- \* 就業・生活支援センターが3か月一回程度訪問・面接。普段は企業内支援員が常時相談窓口となり、体調悪化のサインや生活パターンに着目しながら月一回程度の定期面談を継続している。

## 経過と関係機関の関わり

- ※1) 就職に向けた訓練、就職の方向性の相談
- ※2) 生活パターンの相談、休日の面談支援
- ※3) 職場定期訪問・面談支援
- ※4) 精神・発達障害者雇用サポーターによる支援、職業相談、就労支援の提案、職場実習支援、求人紹介
- ※5) 企業内支援員による常時相談・定期面談、体調や希望によるステップアップ機会の提供
- ※6) 心身状況の診察、服薬治療



## 事例から学ぶ支援のポイント

- \* ハローワークの精神・発達障害者雇用サポーターによる、働き方の相談から就職までの一体的な支援により、円滑な就労支援が提供された。
- \* 就職後の就労定着支援を利用する事により、生活課題への対応ができ、継続的な就労に効果的な支援が提供された。
- \* 企業内支援員の配置により安定した雇用管理がなされ、課題への対応やステップアップに向けた相談等、関係機関での協議がスムーズになされた。

## 基本情報

## 50代男性、身体障害（脳梗塞による身体機能障害）

- \* 勤続25年。D社にて屋外での測定分析業務に正社員として勤務していた。
- \* 妻との2人暮らし。ある朝、体に力が入らず呂律が回らなくなり救急搬送され、脳梗塞の診断を受ける。

## 経過

## 復職準備期

- \* 薬物治療及びリハビリテーションを開始。リハビリテーションにより回復したが軽度の身体麻痺、平衡機能障害が残存する。
- \* 当初より復職を希望していたが、D社も受入対応に迷い、産業保健総合支援センター（別紙：用語説明）に相談。本人・家族の同意もあり、センターの両立支援担当者による個別支援を開始。
- \* 業務内容を確認し、通勤や足場の悪い屋外作業に課題があることを確認。屋内でのPC操作や軽作業での復職可能性を探る事となる。
- \* 身体機能の状態からすぐには運転許可が下りず、症状が落ち着くまでの約半年間は医療機関に通いリハビリテーションに専念することとした。
- \* その間、本人・家族・D社・両立支援担当者が協同しながら職場情報（業務内容や社内制度）を医療機関に伝え、それらに基づいた復職時のリスク管理（気温差のある環境の回避、平衡機能障害や筋力低下による転倒への注意等）について主治医の意見書を取得。
- \* 主治医の意見書を元に、D社へ復職に向けた業務設定や企業側の対応方法の検討を行い、復職のタイミングを計った。
- \* 発症から半年経過後、徐々に症状が落ち着き、主治医及び公安委員会より運転許可が下り、通勤ができるようになったことをきっかけに復職となる。

## 復職後

- \* 週3日、屋内作業を中心とした業務にて復職。屋外作業時は複数人態勢の確保や、足場のバランス・気温差への注意、救急要請方法などを事前に職場と共有し、対応した。
- \* 3か月ごとに医療機関（主治医やリハビリテーションスタッフ）から身体機能の状態に関する意見を受け、職場での業務内容を検討できる体制を両立支援担当者が間に入る事で確立。
- \* 復職に本人・職場とも徐々に慣れ、体調も安定している事から勤務日数の延長を検討している。
- \* 今回の事例を機に、D社として復職に関する研修会を産業保健総合支援センターに依頼し実施。また、産業医との契約を進めるきっかけとなった。

## 経過と関係機関の関わり

- ※1）両立支援担当者による治療と仕事の両立サポート、医療機関と連携しながら本人・企業双方のサポート、企業研修
- ※2）復職に際する業務内容や職場環境の検討・関係機関との協議、サポート体制の整備、今後の復職支援、体制の検討（研修、産業医契約等）
- ※3）薬物治療、リハビリテーション処方、職場への意見書作成・助言
- ※4）身体機能の維持・向上、生活・仕事に影響する機能評価及び情報提供

経過

現在

発症

復職準備

復職 ※徐々に就業時間延長

## 《関係機関の主な関わり》

就労支援機関

産業保健総合支援センター ※1

企業

D社 ※2

医療

入院→通院（脳神経外科）※3

リハビリテーション ※4

## 事例から学ぶ支援のポイント

- \* 産業保健総合支援センターの支援を受けながら、本人・家族・企業・医療機関の意思疎通と連携がスムーズになることにより、復職への道筋が立てられた。
- \* 本人の意向に加えて、企業側の意向や不安感に対して対応することも、結果的に本人の復職の可能性を広げる事となった。
- \* 一つの事例を通して企業側が復職に対する対策を実施し、産業保健体制の強化が図られた。



## 基本情報

### 40代女性、高次脳機能障害

- \* 勤続20年。E社にて営業事務職に正社員として勤務していた。
- \* 在宅時に激しい頭痛を訴え救急搬送。くも膜下出血の診断を受ける。

## 経過



### 復職準備期

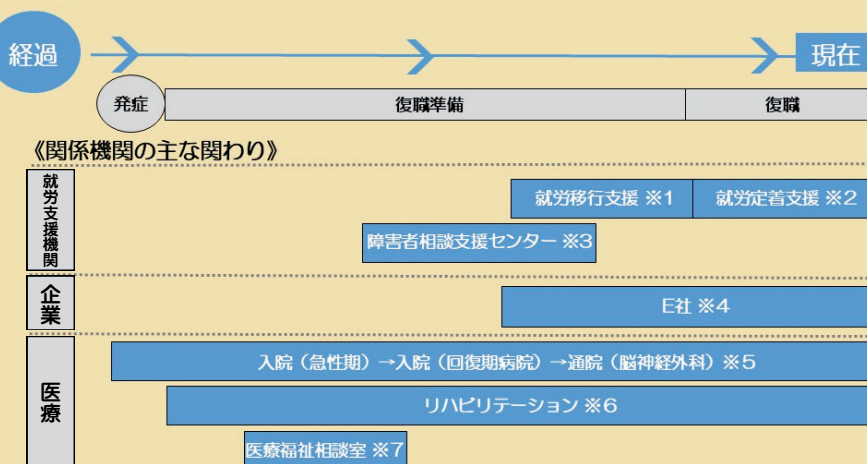
- \* 手術後すぐにリハビリテーションを開始。急性期病院から回復期病院へ転院し、半年間のリハビリテーションを開始。
- \* 身体麻痺はほとんどないが、だるさや記憶障害が残存。再発に注意をしながら少しずつ活動量を増やし、記憶障害の状態に関してはチェックリストを用いて記憶状況を定期的に確認。メモリーノートを使い、予定や話した内容等の補完を行う練習を実施した。
- \* 本人、E社とも復職に前向きではあったが、どれくらい業務ができるのか、毎日通勤できるのか両者とも不安があり、本人が病院内の医療福祉相談室のソーシャルワーカーに相談。
- \* ソーシャルワーカーより、福祉の就労支援サービスで復職に向けた訓練が実施できることを情報提供され、サービスに詳しい市の障害者相談支援センター（別紙：用語説明）に相談。
- \* センターより復職支援が実施されている就労移行支援事業所を紹介され、見学・体験を実施した後、利用に至る。
- \* 就労移行支援事業所では、E社で行っていたPC操作や電話対応などについて訓練を実施。当初は身体的なだるさもあり週3日程度の利用であったが半年ほどで週5日通所可能となる。記憶について、メモリーノートを訓練の場でも活用することができた。
- \* 本人、E社、就労支援事業所が連絡を取り合い、復職の方向性について打ち合わせを実施。

### 復職後

- \* 週5日6時間勤務から開始。PC操作はこれまで通り行い、電話対応は社員間の電話対応を中心とし、外部との電話対応についてはできる範囲で実施することとなる。
- \* また、再発の恐れのある身体状況のサイン（頭痛、めまい、吐き気等）や救急要請の方法を共有した。
- \* 復職後は就労定着支援事業を利用。月一回ほど支援者がE社に訪問し、本人や職場の上司と面談を実施。体調や業務について確認しながら継続勤務をしている。

### 経過と関係機関の関わり

- ※1）復職に向けた訓練、復職に向けた調整、助言
- ※2）企業訪問による面談支援、体調や業務に関する相談
- ※3）地域の就労支援サービス利用相談
- ※4）復職に際する業務内容や職場環境の検討・関係機関との協議、サポート体制の整備
- ※5）手術、薬物治療、リハビリテーション処方
- ※6）身体機能の維持・向上、記憶障害の評価・補完方法の練習
- ※7）ソーシャルワーカーによる生活・就労等の相談



## 事例から学ぶ支援のポイント

- \* 病院内のソーシャルワーカーや市町の障害者相談支援センター等、それぞれサービスや制度の情報をもつ専門窓口で相談ができたことで、復職に向けた具体的な道筋が立てられた。
- \* 医療機関の治療的な関わり、就労支援事業所での訓練や企業との関わり等、医療・福祉が連携をしながらそれぞれ専門的な役割分担をできたことが、復職の後押しとなった。
- \* 復職支援において効果的な連携を成すためには、医療・福祉・企業それぞれがお互いの立場の違いや役割を認識しながら、本人・企業双方の意向を確認し、共通した目標に向かえるよう調整することが求められる。



## 用語説明

---

### 産業保健総合支援センター

※産業保健活動に関する、窓口相談・実地相談、情報の提供、研修を実施。  
その一環として、「治療と仕事の両立支援」を行う両立支援担当者を配置している。

[HTTPS://WWW.TOCHIGIS.JOHAS.GO.JP/COMPATIBILITY/](https://www.tochigis.johas.go.jp/compatibility/)  
栃木産業保健総合支援センター、両立支援の概要について



### 障害者相談支援センター

※市町から委託された相談支援事業者。  
障害者やその家族に対する各種相談に対応している。

[HTTPS://WWW.PREF.TOCHIGI.LG.JP/E65/DOCUMENTS/SYUGAI-SOUDAN.PDF](https://www.pref.tochigi.lg.jp/e65/documents/syougai-soudan.pdf)  
(栃木県内の事業者一覧)

